

愛知大学の語学教室

高橋 秀雄

私は1974年4月に、文学部の専任講師として赴任した。2010年3月の定年を前にして、36年間お世話になった愛知大学に今、心から感謝の念をもっている。

途中1998年に国際コミュニケーション学部の創設に合わせて同学部に転出し、2005年に再び文学部に転入したが、私はほぼ一貫して専門科目としてフランス語学を担当する傍ら、愛知大学の1、2年生のフランス語の授業を受け持ってきた。退職にあたり、スペースを与えられたので、愛知大学における私の語学教室とのかかわりをふりかえてみたい。

1. 赴任のころ

赴任するより3か月ほど早く、たしか1月に、はじめて豊橋校舎を訪れたのだが、その日のことはよく覚えている。採用にあたっての面接のための訪問であった。時間より早く着いたので、構内を歩いてみた。冬の曇り日であったが、春めいた明るさがすでに見られた。3号館の、いまはLL教室になっているあたりを通りかかると、1階の教室で外国語の授業が行われているらしく、先生の声が聞こえてきた。教室の中は見えないのだが、語学教室の緊張したなかにもおだやかな静けさを感じられて、私もこうした教室に教員として迎えられるのかと高揚した気持ちをもった。

面接では、山崎知二、板倉頼音、池田 正の三人の先生方がお会いくださった。私は相当に緊張していたはずだが、いま思い返されるのは、いまは亡き先生方のあたたかいお話しぶりだけである。山崎先生が意外に速い身のこなしで、当日の私の交通費が支払われるようにと会計課に手続きしてくださるお姿が目につかぶ。後に気づいてありがたく思ったのは、それぞれフランス文学、ドイツ文学、英文学の、いわゆる「文学」の大家でいらっしゃるのに、3人の先生方とも言語学、語学に格別の興味をお持ちであり、私の専門に熱心にお話し

を合わせてくださったことである。

4月、授業がはじまり、私も学生たちの前に立った。学生たちのなかには、たしかに、よく勉強しない者もあったが、授業への集中力は十分にあると思った。当時は1クラス50名以上の教室もめずらしくなかったが、人数が多いことがそれほど苦にはならなかった。ある年は、短期大学部で80名くらいのクラスで教えたことがあるが、とてもよくできる数名の学生が毎回、びっしりつまった教室の最前列の中央をいつも占めて授業のはじまりを待ち構えており、教室をみごとにリードしていた。またある年、人数の少ない2年生の訳読のクラスを担当したとき、テキストはいつも翻訳のないものを選んでいたので、アンドレ・モロワの文であったか、2人の日本史専攻の学生が毎回しっかり予習してきて、教室で淡々と、完璧な音読と訳を発表する。それを聞いて、何と豊かな時間だろう、と妙な幸福感をもったこともある。

授業のはじまる前の、あるいは授業終了後の10分間の休憩時間には、外国語研究室（現在の語学教育研究室）、これを外語研と呼んでいたが、そこによく顔を出した。3号館のいまは倉庫になっている小さな部屋で、丈の低いテーブルを小さなソファや椅子が囲むように置かれている。そこへ英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語の先生方が入れ替わり立ち替わり立ち寄り、いつもにぎわっていた。事務の人がいつもにこにこお茶を出してくれた。そこで聞かれるお話しはとてもおもしろかったが、それだけでなく、先生方が見える、活気のある、明るい顔がすばらしかった。この明るさは、語学教室での先生方の熱意と学生たちの授業への集中によって生まれたものだったのではなかろうか、と今になって思われる。

2. 2006カリキュラムの策定にかかわる

時間が30年ほど経過するが、2005年春のある日、有蘭正一郎先生より電話があり、お話があるという。旧研究館の事務室でお待ちしていると、市野和夫先生といっしょにおいでになって、教務委員会において、新しく発足する教学委員会の豊橋教学部長として私が推薦されたとのことのお知らせであった。身の程知らずにも程があると言われそうだが、結局、私はこれを引き受けた。この新設委員会の当面の大きな、しかも1年以内に決めなければならない緊急の課題は、教養部廃止後の愛知大学の教学体制を検討することと、2006年に実施される新しいカリキュラムを策定することであった。

新しいカリキュラムは、新しい学習指導要領による、いわゆる「ゆとり教育」を受けた新入生が入ってくるのに合わせて作られるもので、何としても2006年度実施に間に合わせる必要があった。外国語科目については、大学設置基準上は外国語はすでに必修科目である必

要はなくなっており、大学で外国語を教育すべきかどうかということから議論がはじまった。その議論のなかで、目がさめる思いをしたのは、会議のなかの語学担当者ではないメンバーから、大学教育のなかで最も力を注ぐべき重要な科目は外国語であるという発言があったことである。

豊橋校舎の外国語科目新カリキュラムについてその後、英語担当者会議、未修外国語担当者会議が何度も開催され、従来通り2つの外国語を必修とする方針を継続するとともに、これまでになかったことでは、クラスの人数の上限を、当初案としては、ネイティブ・スピーカーのクラス20名、その他のクラス30名とすること、また、できるだけ多様な外国語を開設すること、さらに、希望者は4年次まで学習を継続できるようにすることなどが決められた。こうした案は科目数抑制の大学方針とぶつかることになり、その調整に苦勞することとなった。

豊橋校舎の全体のカリキュラム案を作り上げることは途方もないことのように思われたが、新井野洋一カリキュラム委員長が2006年の正月を返上して案をまとめられた。しかし、豊橋校舎の外国語科目数については全学の議論のなかでついに決着がつかず、結局評議会の票決で否決され、豊橋校舎のみ、新カリキュラムの実施が1年先送りとなった。これは責任者であった私の無能のせいであり、いまでも申し訳ない気持ちでいっぱいである。

3. 最終年度のフランス語教室

2009年、在職中の最終年度を迎えたが、私はフランス語の授業としては1科目、1年生の「基礎フランス語」を担当している。春学期の受講者数は36名で、内訳は経済学部14名、文学部13名、国際コミュニケーション学部8名、その他再履修者2名である。

第1回目の授業で、春学期に学ぶこと、教室でやること、受講生に望むことなどを述べたあと、次の質問をした。「いまの時点で、自分はフランス語にはまったく関心がないが、ただ必修単位なので履修している、という人があったら、手をあげてください。そういう人にフランス語を学ぶ意義、おもしろさを伝えることが私の役目だと思っているので、どうぞ遠慮なく手をあげてください。」意外なことに、手をあげる人はだれもいなかった。「それでは、みなさん全員がフランス語を学ぶことに少しでも関心があると考えていいですね」と言って授業をはじめた。

私は学生たちに、かならず守ってもらいたいこととして次の2つのことを要求した。一つは、人に教えてもらうのではなく自分で学ぶこと、もう一つは、毎日10分フランス語を使う、具体的には教室で学んだフランス語の発音を毎日くりかえし、発音したフランス語を書き取ること、である。しかし、フランス語を学ぶことに対して示した学生たちの意欲にいつ

わりはないと思われるが、この2つのことを理解し実践することはむずかしい。

愛知大学の学生は、30年前も今も、基本的には変わっていないと思う。ただ、見当ちがいかもしれないが、かれらの好奇心の対象は変わり、学ぶことに純粋に興味を示すという面が希薄になったような気がする。残された何回かの授業のなかで、外国語に接して、その言語を使っている人々に関心をもち、これを使って生み出されたものを通して、それを発する人の声に謙虚に耳を傾けるような生活に少しでも彼らを導いて行きたいと思っている。